

早稲田大学大学院 創造理工学研究科

博士論文審査報告書

論文題目

離散空間としての芸術祭とその空間モデルの実践的研究

The Art Festival as a Discrete Space and its Spatial Model

申請者

山岸 綾

Aya YAMAGISHI

建築学専攻 建築空間論研究

2023年2月

「離散性（ディスクリート）」とは「離合集散について、その最大の多様性を示す理念的な概念」であると建築家の原広司は説明しているが、「離散空間としての芸術祭とその空間モデルの実践的研究」と題する本論は、国際芸術祭においてその作品空間群が、これまでの美術館における機能と行為を多様に拡張した上で「離散性」をもって都市や地域に分散していることを示し、その可能性について論じた研究である。著者は本研究において自らが実践した建築作品を分析した上で、新しい都市・建築空間モデルを提示しており、数々の芸術祭に設計者として関わってきた著者の専門性に即した極めて独創的なアプローチとして高く評価できる。

本論は次の4つの章と、各章の要約と展望をまとめた終章で構成されている。

第一章では、まず原による「離散空間」の概念と試みについて概観し、本研究におけるこの概念の応用について述べた上で、研究背景と目的を整理している。日本において2000年頃から本格的にはじまった国際芸術祭は、美術館を飛び出し（あるいは美術館もその内に含みながら）、まちなかあるいは里山に、数十から数百の作品を分散させ繋ぐことで、都市や地域単位のスケールで大きな空間的影響を及ぼし、これまでにはない状況を生み出しているとしている。しかしそれによって「ソーシャルキャピタル」が形成されるか否かといった「まちづくり」的視点から、もしくは美術側からの真逆の視点つまり地域の為に芸術があるのではないという2つの視点から批判がなされている現況を示した上で、芸術祭が、数多く継続的に開かれている現在においては、まちづくりや美術側からだけでなく、都市・建築空間論として芸術祭を考える必要があると著者は主張する。

第二章では、世界と日本における芸術祭の系譜を辿り、日本においては芸術祭と一括りに言ってもかなり性質が異なるものが含まれるとしている。これまでの主だった「都市型－地域型」という大分類に対して、建築家の武藤隆は「アート・文化活動系－地域・まちづくり系」という1軸を重ねてマトリクスにしているが、さらに筆者は作品の継続性や分散範囲といった軸を新しく加えた提案をしている。本研究では、まず継続性に着目し「コレクション蓄積型」と「企画展型」に分類を行っている。そして大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレや瀬戸内国際芸術祭といった芸術祭は、作品の一部をパーマネントとして残していると述べる。作品を収蔵・保管し、建物の維持管理費もかかる美術館に比して、芸術祭はそれらを回避したイベントという比較もなされるが、上記のような芸術祭はむしろ、点在する形で非常に管理しづらいコレクションを地域に増やし続けており、美術館的役割を既に担っていることを指摘している。加えて分散範囲はその離散性と、都市や地域をどう移動し体験するかに直接繋がることを明らかにしている。また点在する作品群を組合せ巡る体験を「水平の巡礼」と呼び、例えば6年後、10年後に同じ作品を再訪するのは「垂直の巡礼」と定義している。「水平の巡礼」を担保するのは、会場の複数性・分散性であり、垂直の巡礼をもたらすのは、2

年や3年に一度開催されるという芸術祭の周期性と、先の「コレクション」の蓄積であると述べている。

第三章では、芸術祭において巡る「点」にあたる個々の作品空間について整理している。美術館建築においては、1990年代の建築家、磯崎新による世代論（第一世代＝ルーブルのような近世のコレクション、第二世代＝近代のホワイトキューブ、第三世代＝サイト・スペシフィック空間）が常に参照されることを述べた上で、次世代についての議論を取り上げる。芸術文化施設を研究する佐藤慎也が、むしろ第三世代＝リノベーション型美術館であり、第四世代は「人」の為の空間とすることに対して、著者は現代において美術館に求められるのは単一機能の空間ではなく、世代によるとされていたものを、並列して要求される展示室タイプとして変換して読み替えることができるのではないかと指摘する。その上で、それら全てを含むものを現在生まれつつある美術館とし「新第四世代」と名付けている。更にそれらが離散する集合を芸術祭として再定義し、「第五世代」と独自に位置づけている点は高く評価できる。また芸術祭においては、それぞれの世代の空間が新たな展開をしており、これまでの美術館建築にはなかった「展示」以外の機能が重ね合わされ、「鑑賞」以外の行為が多様に含まれているとした上で、作品空間を以下のA)～I)までの9タイプに分類し、芸術祭での具体例と共に示している。

- A) 第一世代タイプ：陳列型
- B) 第二世代タイプ：ホワイト／ブラック／カラーキューブ
- C) 第三世代タイプ：サイト・スペシフィック「作品」型
- D) 新第三世代タイプ1：サイトスペシフィック「建築」リノベーション型
- E) 新第三世代タイプ2：サイトスペシフィック「建築」既存機能保持型
- F) 新第三世代タイプ3：別機能の重ね合わせ／作品化
- G) 第四世代タイプ1：ラーニング空間・パフォーマンス空間型
- H) 第四世代タイプ2：行為の重ね合わせ／作品化
- I) 第四世代タイプ3：展示空間＝滞在・生産空間型

第四章では、これまでの分析から明らかになった芸術祭とその作品空間群の特性を整理し、展開の可能性について論じている。結果として離散性、機能の重合、行為の重合が様々な状況で発生していることを指摘した上で、これらを計画する手法を探っている。そして新しい空間モデルの試案では、9タイプの作品空間が、都市の中に離散性をもって分散するアートフィールドを提示した。愛知県豊橋市の「水上ビル」と呼ばれる縦割長屋のRCビル群を敷地として、既存の店舗・住宅と共存しながら空き部分を開き活用することで段階的に空間タイプを増やしてゆく計画としている。また周囲にある公共施設のサテライトとしての機能も含み、建物が迎える解体・保存の段階も計画に取り込んでいる。ここでは多くの芸術祭

に参画した自身の建築の実作例などを参照しながら、この試案を示している。

これまでの美術館や芸術祭においては作品が変容し、建築がその要請に応答する形で新たな空間が生まれてきていたが、それらを自覚的に見極め、ある程度の柔軟性を持つ多様な空間を離散性をもって繋いでいくことで、アートだけではなく都市への応答にもなることを著者の計画は示唆している。芸術祭を都市・建築空間論として捉えた上で、今後の新しい建築の在り方に対しても提言している点は大いに評価できる。

終章では、各章の要約と展望を述べている。

巻末に作品収録として《スズ・シアター・ミュージアム》《鉢&田島征三・絵本と木の実の美術館》《あいちトリエンナーレ 2016》《タガイ／チガイ》を含む本研究に関連する実践としての建築作品が提示されており、その成果と専門性から、いずれもその建築的価値は高く評価されているものである。

以上を要するに、本論文は独創的な視点から日本における芸術祭を「離散空間」と見做し、その分散方法・巡り方と構成する個々の空間の多様さを提示した上で計画へと展開したものであり、高い新規性のある研究成果と認められる。よって本論文を新しい建築デザインに貢献し、建築計画学の発展に大きく寄与するものとして博士（建築学）の学位授与に相応しいものと認める。

2023年02月

審査員

主査 早稲田大学 教授

古谷 誠章

副査 早稲田大学 教授

博士（工学）（東京大学）

宮本 佳明

早稲田大学 教授

博士（建築学）（早稲田大学）

藤井 由理

早稲田大学 教授

博士（建築学）（早稲田大学）

吉村 靖孝